

〈実践報告〉

生徒指導 ―生徒の自律と将来への目的意識の醸成

松 山 明

1. はじめに

学校は児童生徒の一人一人が毎日楽しく登校し、学習活動を行うところである。しかし様々な要因により、その楽しい学習活動が阻害されているのが現実である。いま、生徒を取り巻く環境は、新しい知識・情報・技術が政治や経済、文化をはじめ社会のあらゆる領域における活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」と言われている。

科学技術の発達や高度情報化、マスメディアの影響は少なからず、生徒の生活環境を変化させており、少子高齢化による家庭形態の変化も進んでいる。このような社会の変化から、最近の生徒の否定的側面として、対人交渉能力や共感性などの社会性の欠如や、自発性や個性、耐性の欠如などが挙げられる。

また、喫煙、飲酒、万引き、窃盗、不純異性交遊、暴力などの反社会的問題行動や、自信喪失、不安、孤独、自閉、無気力などの非社会的問題行動をどう指導し改善するかには、学校、家庭や地域社会、関係機関との連携が不可欠なものである。

文部科学省発行の*¹生徒指導提要、第1章「生徒指導の意義と原理」の第1節、生徒指導の意義と課題には次のような記述がある。

生徒指導とは、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のことです。すなわち、生徒指導は、すべての児童生徒のそれぞれの人格のよりよき発達を目指すとともに、学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指しています。生徒指導は学校の教育目標を達成する上で重要な機能を果たすものであり、学習指導と並んで学校教育において重要な意義を持つものと言えます。

各学校においては、生徒指導が、教育課程の内外において一人一人の児童生徒の健全な成長を促し、児童生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指すという生徒指導の積極的な意義を踏まえ、学校の教育活動全体を通じ、その一層の充実を図っていくことが必要です。

2. 学校における生徒指導体制

学校における生徒指導は『生徒指導提要』の一文にあるように、学校教育のすべてに作用する教育機能を持つものである。全校の教職員が教育目標の達成のためには、それぞれの学級担任において、学級経営の充実を図ること。生徒指導部がリーダーシップを発揮すること。生徒指導に関する研修情報を交流すること。緊急事態発生にも柔軟に対応できるよう共通理解を図ることが大切である。そして、中学校において生徒指導主事は生徒指導部の中核であるといえる。

大阪市立 T 中学校に在籍期間中、平成元年度から 2 年間、生徒指導主事という役職を務めた。3 年間の学年主任を務めた後の生徒指導主事の仕事である。1 校目から転勤した当時、T 中学校は荒廃していた。暴走族の T 連合中核が卒業生で、授業妨害、シンナー吸引、授業離脱などの問題行動も多く、学年生徒が落ち着かない状況だった。転勤 1 年目に 3 年 8 組の担任をした。1 校目の中学校で 3 年生を三回卒業させていたので、T 中学校での 3 年生の担任にはすぐに馴染めた。

当時に今振り返ると、生徒たちは修学旅行や合唱コンクールに一生懸命取り組んでいたと思う。こちらが熱意をもって取り組むと生徒たちは素直に反応した。ある意味、純朴で真面目な生徒が多かったように思う。平成元年度の初年度は大阪府教育委員会主催の生徒指導主事講座 26 時間を受講し、平成 2 年 2 月 22 日に終了した。

当時の研修会資料なのか、生徒指導主事会で共有した資料なのかは今となっては定かではないが「生徒指導上の留意点」(生活指導上の留意点)が手元に残っている。今読み返しても、十分に現在の教育事情にも適応できる内容であるので以下に提示する。

生徒指導上の留意点

1. 子どもを理解すること

- (1) 子どもを理解することは自己変革することである。

子どもの一人一人の立場に立つ

- (2) 基本的な生活の場での子どもの行動やその背景をとらえる。

子どもの良いところを見つけ出す

- (3) 子どもの感覚や気持ちをとらえ、子どもの立場で物事を考えることができる。

子どもと話題の共通性を持つ

- (4) 家庭での状況、子どもの持つ興味や根本的な悩みをとらえる。

- (5) 予断と偏見の意識で生徒を指導しないで、子どもとの信頼関係を深めるよう努める。

2. 親を理解すること

- (1) 親の持つ教育観をとらえる。
 - (2) 親の生きてきた歴史・特徴をとらえる。
3. 子どもとのかかわりの中で
- (1) 問題行動を起こした時の指導において、子どもの変革に迫るような指導の見通しをたてきれているか。
 - (2) 「自分の心を全部わかってくれている」という関係の上での指導になっているか。
子どもと指導者の間の親近感
 - (3) 指導者が子どもをとらえきれするためには多くの時間がかかる。マラソンのようなもので指導者と子どもの関係にもいろんな波がある。
 - (4) 子どものもつ集団に位置づきたい、認められたい、評価されたいという気持ちに対して、指導がきりこめているか。
 - (5) 子どもが悪いことをした時の指導は悲しみをこめた指導になっているか。
4. 親との関わりの中で
- (1) 親との関係が一般的な対話ができるという関係だけでなく、信頼関係に発展しているか。
 - (2) 具体的な子どもの指導方法にかかわって親に迫りきれているか。
 - (3) 親との信頼関係をバックにして子どもへと迫る指導ができていくか。
(親の願いを受け止めた指導ができていくか。)
 - (4) 学校の指導が伝わりにくい親に対しては複数の体制で臨むこと。
5. 授業の中で
- (1) 授業を始めるにあたっての確認事項を守る。
 1. 50分の授業の保障
 2. 「始め」「終わり」の挨拶をしてけじめをつける
 3. 出欠の確認
 4. 環境整備
 5. 日直の徹底
 6. 学習用具の点検
 7. 学習係の指導
 - (2) 授業にあたっては衆知を集めて授業内容・指導方法について研究をする。
 - (3) 授業の中で配慮する事項として
 1. 毎時間の学習のねらいを明確にする
 2. わかりやすい言葉で要領よく
 3. 考えさせる学習を
 4. 発表の機会を公平に
 5. 誤った答えこそ大切に
 6. 成功の喜びを味わわそう
 - (4) 授業の後で、常に授業をふりかえり自己点検しよう。
6. 学級集団づくりの中で
- (1) 具体的な学級目標を立てて努力し、常に点検を行うことが大切である。
 - (2) 問題をかかえた子どもが、学級集団の中心にすわっているか、また支え合う集団になっているか。

- (3) 日々のあらゆる活動についての自己点検を確実に言い、問題点については、生徒に問題をかえし、生徒自らが解決していくように指導しているか。
- (4) リーダーの育成を心がけ、学級の組織が機能しているかを常に点検し、責任の所在を明確にしているか。
- (5) あらゆる活動を通して子どもを観察し、相談活動等を行い、疎外される子どもをつくらぬよう十分配慮しよう。
- (6) 家庭訪問等により保護者等との連携を密にする。

7. 学年の指導体制の中で

- (1) 学年会等の中で、問題をかかえた子どもの情報が常に交換され、共通理解された中で指導できるような協力体制を確立する。
- (2) 問題等が起こったときは学級担任が中心になり、学年・各部などの協力を得て、早期に解決できるように手立てをとるように努める。
- (3) 常に相互点検・相互援助できる体制をととのえる。
- (4) 学年相互の連携を密にする。

8. いついかなる場でも気をつけたいこと

- (1) 全職員が、いつでも、どこでもすべての生徒の指導ができるようにする。
- (2) やさしさの中にも厳しい生活規律が確立するような指導を貫く。
- (3) 指導する必要がある事項は、知ったらすぐに連絡をとり合う。
- (4) 心で受けとめ何でも相談できるように努める。
- (5) なまの感情をぶつけぬようにしよう。
- (6) 予断と偏見で子どもを指導しないこと。

以上の8項目にまとめられた、生徒指導上（生活指導上）の留意点であるが、生徒指導の基本的な留意点が述べられ、生徒指導主事として大切にしてきた基本である。

学校においては、先生たちが日々の教育活動において目の前にいる生徒を理解することが第一歩である。子ども一人一人の立場に立つことや、先生が子どもの良い点を見つけることの大切さを説いている。また、次の項目は、子どもそれぞれの家庭環境の違いと保護者の理解についての項目である。生徒一人一人は生まれ育った環境が違う。その家庭環境を知り、親の考えを理解し、熱心なかかわりの中で信頼関係をどう作っていくかが要点である。

日常の連絡も電話だけに留まらず、家庭訪問をして直接話すことの大切さを説いている。学校の教育活動の中心である授業の中での項目では、50分の授業をどう組み立てるか、生徒に分かりやすく、参加させる授業の工夫と授業改善の視点などが述べられ、学級集団づくりの中での項目では、一人一人に居場所があり、子どもが仲間外れにされる学級となら

ないような学級経営の大切さが述べられている。

教師集団がつくりだす学年の指導体制や学校全体の指導について共通理解すべき項目が、いついかなるところでも気をつけたいことに集約されている。

学校に一步足を踏み入れれば、生徒一人一人と教師がつくりだす雰囲気でのどのような状況かはすぐに感じ取ることができる。子どもと教師の関係が良好であれば、生徒一人一人が毎日明るく、元気に登校してくる。学級や係活動や部活動に活躍する居場所があり、分かりやすく楽しい授業が保障されていれば、生徒の心のベクトルは安定し学校は荒れない。

生徒指導主事や教務主任、学年主任などの中堅教員は絶えず、生徒の動向を注視し、子どもたちを正しい方向に導くよう、常に情報交換し、努力を積み重ねることが大切である。

これまでの経験から、荒廃している学校を立て直すためにはどのような対策をとることが必要かを考えた時、まずは、生徒一人一人を理解し、生徒の活躍の場を保障すること。

先生が、授業づくりと授業研究に一生懸命に努力すること。生徒が活躍できる学校行事や学年行事を企画し、生徒会や学年議会が行事の進行を取り仕切る。生徒一人一人が生き生きと活動できる場所や時間をつくることから学校の再生が始まるのである。

3. 家庭教育を考える

前章で紹介した「生徒指導についての方針」のなかで、1. 子どもを理解することの次に2. 親を理解することがある。教員は学校のすべての教育活動で子どもを理解することに努めるが、親を理解することは、少しの距離感と時間がかかるのが実情のように感じている。

しかし、児童生徒が生まれ、義務教育に就学するまでは、家庭で親が子育てをする。人として、どのように生きるか、その基本を育てるのは家庭である。平成18年12月22日に改正された教育基本法の第十条に家庭教育、第十一条に幼児期の教育が新設された。

第十条 父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする。

2 国及び地方公共団体は、家庭教育の自主性を尊重しつつ、保護者に対する学習の機会及び情報の提供その他の家庭教育を支援するために必要な施策を講ずるよう努めなければならない。

第十一条 幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならない。

家庭教育は乳幼児の時期から親と子、家庭とのふれあいを通じて、生きるための基礎的な資質や能力を育てることであり、すべての教育の出発点であるといえる。しかし、最近の子どもの特徴をあげると、社会生活の基礎的なルールを身に付けていない。物事を深く考える習慣がなく、感情的で短絡的に行動する傾向がある。以上のように、様々なケースで子どもはシグナルを発している。それに気づく大人の感性がいかに大切なのかを考えることが大切である。親として家庭教育で子どもたちに身に付けさせることは、基本的な生活習慣、生活能力、豊かな情操、他人に対する思いやり、善悪の判断などの基本的倫理観、社会的マナー、自制心や自立心などの「生きる力」の基礎的な資質・能力となるのである。

家庭教育を考えると、子どもにとってどういう親であるべきなのか。幼児期の家庭教育について考える参考図書として、*² 詫摩武俊著の「伸びてゆく子どもたち 幼児期の家庭教育」という本がある。私が生徒指導主事の時代に出会った新書であるが、子どもの心の理解や生徒指導には役だった本である。その本の巻末に子どもの幼児期の思い出（幸福度テスト）が30項目記載されている。その中から代表的なものを以下に15項目あげる。

- (1) 自分が覚えている古い記憶の中には、親と過ごした楽しい出来事に関することが多い。
- (2) 幼稚園や保育園はおもしろかった。当時の先生や友達の顔や様子を懐かしく思い出すことができる。
- (3) 父と母は仲良くしていたようである。少なくとも子どもの前で争ったことはない。
- (4) 親は何か質問すると、面倒くさがらずに、丁寧に、理解できるように答えてくれた。
- (5) 兄弟と喧嘩をしたことはあるが、他の兄弟に比べて自分が不公平に扱われたとは思っていない。
- (6) 父親はよく肩車をしてくれたり、相撲の相手になってくれた。父親の体の感触を覚えている。
- (7) その当時の私の写真が整理されて残っている。
- (8) 親はその当時の友人関係をよく知っていてくれた。
- (9) 家に客が来たり、こちらから出かけたりして、にぎやかで明るい家庭であった。
- (10) 一家そろっての食事が楽しかった。食事の時はしかられたことはなかった。
- (11) 母親は叱るとき厳しく叱ったが、普段は優しい温かい人柄で、その頃の笑い声や話し方をよく覚えている。
- (12) 身に付けるものが不潔にならないように気を使ってくれた。
- (13) その当時の家に、どんな品物がどこに置かれていたかを大体覚えている。
- (14) 父や母はお互いの悪口や愚痴を子どもの前で言うことはなかった。お互いに大事にしているようであった。

(15) 親と大きな声で一緒に歌を歌ったことがある。

幼児期を思い起こして、15項目の中で該当数が多ければ、あなたの幼児期は幸福だったといえるだろう。

4. 未来に希望を持ち「夢」を描くために

校長職に就任すると、校長会や教育研究会、PTA、地域の会合、小学校・高等学校の学校評議員会など様々な会合で、近年の教育課題について意見を求められる場合が多い。

また、会議での挨拶や教頭会での指導助言など様々である。その時、いつも思うことは教諭の時代、教育委員会指導主事の時代、同和教育企画室の主査時代、教職員課の管理主事時代などの経験や様々な体験から知り得た情報と、体感したことは本当に貴重なものである。

その場に立たないと感じるができない空気感や、独特の雰囲気などもその一つである。そして、その体験から生まれた体験談や様々な経験から生まれた経験談は現実味があって重みがある。

生徒指導について考える時、生徒たちには失敗を恐れずにいろんなことに挑戦することの大切さを伝えたいと思う。また、保護者には、子どもともっと向き合って色々な話をしてほしいと願う。いろいろな情報が溢れ、大人も忙しさの中で子どもと向き合う時間が少ないのである。そのような家庭状況のなかで、私に大阪市天王寺区保護師会から依頼のあった*³機関誌への投稿文を次に紹介する。

高度情報化、少子高齢化、国際化、団塊世代の退職など社会の急激な時代の進展とともに、子どもを取り巻く教育環境も著しく変化しています。いま社会では青少年が関わる事件が多く発生しています。親による児童虐待、青少年による凶悪事件、いじめ・不登校の問題、インターネットや携帯電話による『プロフ』の書き込みから発生した事件など、こころの痛む出来事が多く起こっています。「物の豊かさ」を追求するばかりに「心の豊かさ」を失ってしまった結果ではないでしょうか。

このような青少年問題の背景の一つに、大人の規範意識の欠如があると言われていています。現代の社会の風潮を見直し、大人自身の姿勢や大人社会のあり方を省みることが必要です。

第一に大切なことは、「子どもに正しいものの見方や価値観・規範意識を育てること」が必要です。そのためには、「だめなことはダメだ」と叱り、「良いことはしっかりと褒めること」が必要です。

子どもはまわりの大人や、親の言葉・行動の全てを吸収し学びます。*⁴ドロシー・ロー・

ノルト著の「子どもが育つ魔法の言葉」という本の中から自尊感情に関する三つの詩を紹介します。一つ目は「励ましてあげれば、子どもは自信を持つようになる。」二つ目は「褒めてあげれば、子どもは明るい子に育つ」です。親の誉め言葉は、子どもの心の栄養となります。

三つ目は「認めてあげれば、子どもは自分が好きになる」です。自分のことが好きで心が満たされている子は、人にも親切です。親や大人が子どもを励ますことや褒めること、認めることを心に留めておいてください。

第二に中学生を正しく導くためには「将来に夢をもたせること」です。将来の夢を探することは容易ではありませんが、好奇心を持ち、何か心を打たれることから、夢を描かせることができます。将来の夢や仕事、いわゆる職業観を育成するためのキャリア教育、職業講話、職場体験学習などはそのような観点から実施しています。子どもたちを取り巻く大人たちが、子どもにしっかりと語りかけ、将来の仕事のことについて話すことは、家庭で実行してほしいと思います。

第三は「目標を持ち、学ぶ意欲をもたせること」です。学校では、学年や学級で、学期ごとに個人の目標を決め、生活が充実するように取り組んでいます。ところで、学習内容がしっかりと身につけている人はどのような生活を送っているのでしょうか。昨年実施した全国学力学習状況調査の結果からは、「早寝・早起き・朝ご飯」の規則正しい生活習慣があり、部活動にも参加して毎日がいきいきしている生徒は学びの効果を上げているという結果が出ています。

心豊かで活力ある子どもを育てるため、学校、家庭、地域という子どもを取り巻く三者は「地域の子どもは我が子ども」の願いのもと、これまで以上に相互の連携を深めるとともに、まず私たち大人が心豊かな人間となるよう、三つの点を心がけ、充実した毎を送りたいものです。

5. 進路指導とキャリア教育

前章で述べた通り、中学生を正しく導くためには、将来の夢や目標を持たせることが大切である。将来自分はどのような職業に就くのか、そのためには今どんなことを学ぶべきなのか。未来の自分に適している仕事は何なのかなど、将来の進路に対する不安は生徒にとって様々である。その解決のためには、生徒たちにいろいろな仕事について出合わせる機会が必要である。作家の村上龍さんは*⁵「13歳の進路」という本の「はじめに」で以下のように述べている。

多くの中学校で、また高校でも、「進路指導」が行われている。だが、そのほとんどは単

に子ども・生徒の学力と、家庭の経済力に応じたもので、しかも中学校から普通高校、大学から就職というコースを標準としている。子ども・生徒の適性或能力を考えた上でさまざまな進路を示す、というようなシステムにはなっていない。子ども・生徒は基本的に、大人に向かう進路を自ら学びとるのではなく、能力と経済力に応じて「振り分けられ」、ポジションを「与えられる」ことになる。

だが、その原因は、進路指導を行う学校や個別の教師が無知で怠慢だからではない。もともと日本の教育は、子どもが自立して生きるための能力を開発するというより、集団で働くための一般的で一律の知識と規律を教えるのを目的としてきた。明治の開国と近代化の過程で、「富国強兵」という目的で確立されたものだが、その基本的な考え方とシステムは変わっていない。だから、教育のカリキュラムに「職業訓練」という概念が組み入れられていない。「進路」というのは、未来に向かって「進んでいく道」だ。進路は未来へとつながっている。できれば、親や教師や社会から「振り分けられ」「与えられる」のではなく、自ら「選びとる」という積極性を持ってほしい。進むべき「未来への道」を選ぶためのヒントを示すために、この「13歳の進路」は作られた。

作家の村上龍さんの指摘どおり、学校では職業体験学習やキャリア教育を通して生徒の職業観の育成のために取り組みを進めているが、単なる学年の取り組みだけで終了するのではなく、地域や保護者を巻き込んだ、一年生から三年生までのきめ細かな進路指導計画が必要である。

6. 学校・家庭・地域の三者連携

教育基本法の第十三条は、学校、家庭、地域住民等の連携協力について述べられている。

第十三条 学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力を努めるものとする。

学校、家庭、地域の三者の連携は教育にとって大切なものである。子どもを取り巻くこの三者の連携が円滑になされている学校ほど子どもたちは素直に、生き生きと育つと感じている。子どもが生まれ、家庭での親としての子育て、家庭教育がはじまり、幼稚園、保育園、子ども園などでの就学前教育で子どもたちが成長していく。そして義務教育での小学校、中学校では生まれ育った地域で子どもたちはさらに成長する。

そういう意味で、地元地域の大人たちの「教育力」が必要なのである。最近、その地域の教育力が弱くなったという言葉をよく耳にする。それは、反面、学校が地域にあまり情報発信をしていないことかもしれない。「開かれた学校」「開かれた教育課程」という言葉の通

り、学校の教育活動がさらに開かれることが求められている。

子どもの健やかな成長と健全育成のために必要な、学校・家庭・地域の三者の連携が大切であるということを再度確認して、それぞれの立場で子どもを中心に据えた連携の深まりを学校が中心となって考えることが必要である。

7. 生徒へのメッセージ

最後に中学校勤務の最終校 S 中学校の PTA 新聞*⁶「未来のために夢を描く」の一部を紹介する。

*全国学力学習状況調査・生徒質問紙から

平成 24 年 4 月実施の全国学力学習状況調査の生徒質問紙の「自分には、よいところがあると思う」という質問に、あてはまるという回答が、全国平均 24% に対して、本校生徒は 35.4% であり、自分を大切に思い、自分に誇りを持つ心が高いという結果を得ています。是非この気持ちを大切に、将来社会に貢献する人に成長してほしいと思います。

私たちは毎日の生活を振り返ると、思うようにいくこともあれば、上手くいかないことにも直面します。楽しいことやうれしいこともあれば、辛いことや苦しいこともあります。しかし、これからの人生を輝かしいものにするためには、夢や目標を持つことが大切です。

*ビジョンとハードワーク

10 月 5 日に私は全日本中学校長会研究協議会・大阪大会で山中伸弥教授の話を聞くことが出来ました。その話の中で一番心に残った言葉は V と W ということでした。iPS 細胞を作製した山中伸弥教授は、アメリカのグラッドストーン研究所所長ロバート・メーリー先生から教わった言葉「研究者として成功する秘訣は V と W だ。V と W さえ実行すれば、君たちは必ず成功する。研究者にとってだけでなく人生にとっても大切なものは V と W だ。V と W は魔法の言葉だ。」と諭され、その言葉を座右の銘とされているというお話でした。V と W の V は Vision (ビジョン) の V です。ビジョンとは長期的目標といいかえてもよいでしょう。もう一つの W は Work Hard の W です。ハードワークつまり一生懸命働くということです。人間として成功するためにはビジョンとハードワークが必要でどちらが欠けてもだめだということです。やはり、目標を持ちしっかりとやることはどの世界でも大切であるということがわかります。

*夢を描き、豊かな人生を拓くために

全校生徒の一人ひとりが、未来予想図を描き、毎日を大切に過ごすことが大切です。これからの人生を豊かに送るためには、みなさんがたくさんの人に出会い、経験を積むことが大切です。さらに、読書することからは先達の人生や経験、考え方、生き方を学ぶことができます。「教養」それは世界を拓くツールです。明日からの新しい進路、近い将来の大

阪、日本のこれからの社会を明るく、元気にする皆さんの力に期待します。皆さんの得意分野で社会に貢献できる人になれるよう、一層の努力と挑戦と頑張りを期待しています。

8. おわりに

生徒指導提要の第一章 第一節の「生徒指導とは、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のことです。すなわち、生徒指導は、すべての児童生徒のそれぞれの人格のよりよき発達を目指すとともに、学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指しています。」のことは通り、学校の教育活動には一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高める取り組みの構築と視点が必要である。

教員がそのことをよく考え、あらゆる場面で、教え導くことが必要であり、将来の目標を持たせ、毎日の生活のあり方が大切であるということを様々な場面を通じて論ずることが必要である。また、子どもの個性に応じた適切な進路指導も必要な視点となる。

さらに、保護者・地域住民に『開かれた学校』『開かれた教育課程』というキーワードを管理職が、あらためて認識し、それを実践する取り組みを推進するとともに、日々の教育活動を担う教員には、「生徒指導は、すべての児童生徒のそれぞれの人格のよりよき発達を目指すとともに、学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指す。」ということを常に意識した取り組みを推進するように、指導しなければならぬ。各地域の学校が、学校経営マニフェストを定め、教育目標に向かって取り組みを進め、「開かれた学校」として成果を上げた学校が各地域に着実に増えていく未来に期待をしたい。

参考資料

- * 1 文部科学省 平成28年『生徒指導提要』教育図書株式会社 引用ページ 1ページ L1.～L9.
- * 2 東京都立大学教授 詫摩武俊 昭和63年『伸びてゆく子どもたち 幼児期の家庭教育』中公新書 引用ページ 198ページ～201ページ
- * 3 大阪市天王寺区 保護師会 機関誌
- * 4 PHP 研究所 11月5日 ドロシー・ロー・ノルト 2009年「子どもが育つ魔法の言葉」110ページ 134ページ 154ページ
- * 5 株式会社 幻冬社 村上龍 2010年「13歳の進路」中央精版印刷株式会社 はじめに 3ページ L1～L20
- * 6 大阪市立昭和中学校 PTA 広報委員会「PTA 昭中タイムス 108号」